生きて

高校文芸部　顧問から小説作り学ぶ

溪水社社長　木村逸司さん（1942年～）④

1958年、呉市の広高に進む

川尻（現呉市）の自宅から蒸気機関車で通学した時代です。当時の広高は1クラス50人で、8クラスありました。クラブはバレー部に入ったのですが、背が低くて不利だと感じ、すぐにやめました。小学生の頃から続けていた柔道は、中学時代の試合で実力の差を見せつけられ、はなから続けるつもりはありませんでした。

中学の頃、文学への関心も高まったこともあり、のぞいたのが文芸部でした。部員は15人ほどで、大半は女子でした。男子は私を入れて3人くらいだったと思います。

活動はとても活発でした。山碕雄一という熱心な先生が、ちょうどその春、顧問になられたからです。広島大文学部を卒業したばかりの国語の先生でした。私は詩を書きたかったのですが、入部後すぐ、「おまえは詩には向いとらん」と言われ、小説を書くことになりました。

1年生の夏休みに、ある短編作品を見てもらいました。ところが、何度も書き直しを命じられ、暑い中、学校近くの先生の下宿まで毎日、通わなければなりませんでした。戦後、外地から引き揚げてきた少女をモデルにした作品でしたが、主人公の感情表現や情景描写など、とても厳しく指導されました。しかし、そのおかげで、この作品は大手新聞から表彰されました。

顧問の指導もあって広高文芸部誌「火山脈」は、県内の高校文芸部の間でも一目置かれるようになる

3年生の時、中国新聞の高校文芸誌コンクールで「火山脈」は1位に選ばれました。このコンクールには作品の部もあり、1位が私の「風のまち」という短編でした。ある男子学生が、路面電車内でしばしば出会う女性事務員に恋心を抱く物語です。

有名作家の小説を乱読したこの頃、夏目漱石や森鷗外の文体の妙に感動し、人間の原罪を描くような有島武郎の作風に引かれました。

小説という世界にいざなってくださった山碕先生とは、社会に出てからも同人誌作りで交流が続きました。定年後も文芸評論などに打ち込んでおられましたが、2003年に亡くなられました。

広高文芸部顧問だった山碕先生㊧と

生きて

広島へ　4畳半部屋で文学論争

溪水社社長　木村逸司さん（1942年～）⑤

1961年、現在の広島市中区東千田町にあった広島大の文学部英文学科に入学する

高校時代、文学にのめり込んだこともあり、大学は文学部を考えました。英文学を専攻したのは、高校時代に読んだシェークスピアの影響が大きかったと思います。国語同様、英語も好きでしたし、国文学より自分の世界が広がるとも思いました。

実は、多くの文学者が出ている早稲田大に憧れていました。しかし、父は鉄工所を畳み、知人と新たな事業を始めたばかりでした。私の下にも子どもを4人抱えており、東京の私大などとても無理な状況でした。父に出してもらったのは入学金と教科書代としての2万円、そして詰め襟学生服、革靴です。あとは奨学金とアルバイトで賄いました。

広島市に出るのは生まれて5度目でした。最初は、原爆で行方不明になった友人を捜す叔母に連れられて。終戦の翌年ではないかと思います。広島駅前も焼け野原で、草が生えていた印象しかありません。終戦から16年たったこの頃になると、その駅前もバラックの飲み屋街になっていました。

キャンパスでは、他学部が軒並み鉄筋3階建てだったのに対し、文学部は木造2階建てでした。当初は革靴で通っていましたが、いつしか履き慣れたげたで通うようになりました。高校に続き文芸部に入ったこともあり、多少バンカラを気取った気もします。木造廊下をげたで歩くのですから大きな音がします。ある日、学生指導の先生に呼び止められました。差し出されたのは一足のわら草履でした。

最初に間借りした家の大家さんや住人にも迷惑を掛けました。家庭教師代と奨学金を合わせると、当時の大卒初任給よりいい月1万3500円の収入がありました。部屋が大学から近かったこともあり、「木村のとこに行けば飲める」とうわさが立ち、4畳半の部屋は、すぐに文芸部員のたまり場になったのです。

金欠の月は文芸書を質に入れました。当時の本は懐も豊かにしてくれたわけです。しかし、安いウイスキーを囲んで明け方まで文学論争を繰り返したため、1年余りで大家さんから退去を言い渡されました。

広島大の友人たちと。前列左端が木村さん

生きて

作家への夢　高校に続き最高位受賞

溪水社社長　木村逸司さん（1942年～）⑥

文芸部では、部員の小説、詩、短歌を部誌「広大文学」で発表。木村さんも短編小説や詩を寄稿した

当時の流行は実存主義文学でした。サルトルやカミュ、カフカなどを熱く語ることが多く、「広大文学」に寄せられる作品にもその傾向が表れていたと思います。

ただ、学生運動も盛んな時代で、岡山大や山口大の文芸部は政治色が現れていました。私たちは純文学に徹していたので、文芸部同士の交流会では論争になることもありました。私は土俗的、因習的なものを描いた作品が多い米国のフォークナーの影響を受けたように思います。

地主の家に戦前から住み込みで仕えた男性が、戦後社会で感じる孤独をモチーフにした短編「彦爺のこと」は1965年、中国新聞の「新人登壇文芸作品募集（中国短編文学賞の前身）」で2位に入る。この年、1位の該当作品はなく、最高位の受賞となった

4年生の時の作品で、作家への夢も膨らみました。

彦爺のこと

木村逸司

1965年1月25日の中国新聞朝刊に載った受賞作「彦爺のこと」

当時の広島大には文芸部や新聞部のほか、マルクス研究会のようなサークルもありました。ある意味、面白く緊張感もあった時代です。

私は英文学科でしたが、高校時代と同じく文芸部に入りました。英語より国語系の成績が良く、「なぜ国文に行かなかったのか」と皮肉る先生もいました。そんな英文学科にあって、特に記憶に残るのが松元寛先生です。先生は、シェークスピアが専門でしたが、文芸評論もされており、実は高校時代に1位に入った中国新聞「高校文芸誌コンクール」の審査員の一人でもありました。

後に溪水社を起こすのも先生が関係します。大学時代に先生が口にされた「広島は文化不毛地帯」という言葉に刺激されたのです。しかし、創業後は株主として社を支えてくださいました。本当に不思議な縁を感じます。

広島大の文芸部は、広高時代と違って男性部員が多かった

2年後輩には、売れっ子作家になった大下英治君もいました。彼は卒業後、ノンフィクション作家の大宅壮一さんのマスコミ塾に入ったり、同じ広島育ちの梶山季之さんに弟子入りしたりして腕を磨きました。